幼稚園における子どもの会話の分析

津守　真
吉田三和子

としお「あのね、きのうね、うちにね、こんな大きなねずみがいた」
先　生「それでどうしたの」
としお「そいでね、電気冷蔵庫の後に入っちゃった」

（五才児、登園直後先生との会話）

いずみ「おじいちゃま、すごくおこんのよ」
ともこ「うち、おじいちゃま死んじゃった」
いずみ「そう」
ともこ「うちね、五人よ、おばあちゃまとあたしでしょう。ひろこに、パパ、ママ、ほら、五人でしょう」（指で数えながら）
いずみ「うちは六人よ」
ともこ「おじいちゃま、おばあちゃま、パパ、ママ、女中さんと、いずみちゃん？」
いずみ「そう、前はもっといたのよ、赤ちゃんもいたの」
ともこ「赤ちゃんは、いずみちゃんじゃない？」
いずみ「そうか、アハハ……」

（五才児、弁当の時の会話）

まちこ「これ、私の帽子よ」
まさあき「僕もあるよ、これだよ」
しけゆき「僕のこれだよ」
まちこ「これ私の」（お弁当バッグをさす）

（三才児、持物を見せ合いながら、友だち同志の会話）

ちひろ「お山作ろう」
あきひさ「僕たち、トンネル作ってるんだよ。こわしちゃだめだよ」
ちひろ「うん」
あきひさ「今日ね、僕、結婚式だから、早く帰らなくちゃだめなんだ」
こういちろう「僕、お母さんの結婚式知ってるよ」
あきひさ「でもね、僕の結婚式じゃないんだよ、ほら先生、トンネルだよ」

先生　「トンネルできたみたい」
あきひさ「トンネルできました」
（三才児、砂場で遊んでいて）

子ども同志の会話、先生との会話など幼稚園の隅で、ちょっと立ちぎきしていると、おもしろい。いくらでもこんな会話を拾うことができる。子どもたちは楽しそうに話しているし、その中にまじって話している先生もたのしそうである。このような会話を通して、子どもたちはお互い同志を知り合い、相手の話をきくことを学び、自分のことを話しすることを学んでゆく。言語指導の機会は、このような日常生活の中での会話の中にあり、また、そこに材料を見出して、より一層、計画的な指導の方法を考えてゆくこともできるのである。

それでは、幼児は幼稚園でどのような状況の下に、どのような会話をしているのだろうか。三才児の会話は、五才児の会話と相異するだろうか。男の子同志の会話は、女の子だけのグループと違う点があるだろうか。先生が入るときの会話は、子どもだけのときと違うだろうか。話の話題について、あるいはまた話をかわす人数において、さらにまた、話をかわすやりかたなど、いろいろの疑問が出てくる。

そこで、これらの疑問を明きらかにし、幼稚園における子どもの会話の実態を知るために、お茶の水女子大学付属幼稚園で調査をおこなってみた。ここではその調査の結果を中心にして、上に掲げた諸点について述べる。

幼稚園の中での子どもの会話を系統的に拾うことは、たいへん手数のかかる仕事である。それは、いつ、どこで起るかわからないし、またその分量もものすごく多いのである。そこで、お茶の水女子大学の幼稚園教員養成課程の学生のかたたちに願って、その膨大な記録をとっていただいた。したがって、この調査報告は、ここに参加して下さった、四十四名のかたがたの労力がもとになっていることを最初にことわっておきたい。

さて、そのたえまなしに幼稚園中でしゃべっている会話を、できるだけ偏りなく、系統的に調べるために、次のような方法をとった。

1、クラスごとに、子どもの名前のリストをつくる。
2、会話記録者は、子どもの会話のおこなわれているところに近づいてゆき、会話が一くぎりついて、別の活動にうつるまで、その会話を記録する。そのとき、そこに参加した子どもの名前をリストにチェックしておく。こうして、原則として、一日のうちに、一クラス全員の名前がチェックされるように記録する。

調査の時期は、二期にわたっている。第一期は、昭和三十四年二月―三月で、学年度末で、各組とも子どもの年令は、最高のときである。第二期は、昭和三十四年四月―五月で、年令は最も小さいときであり、また入園したての子ども混っている。

こうして採取した会話の数は、第一期総計、一、九五四枚（内、三才　七〇九枚、四才　五五三枚、五才　六九二枚）　第二期総計四四〇枚、（内、三才　一〇四枚、四才　一〇〇枚、五才　二三六枚）である。これを、子どもひとり当り何枚くらいになるかをみると、第一期は、三才　二〇・三枚、四才　七・九枚、五才　九・九枚、第二期は、三才　三・二枚、四才　一・四枚、五才　三・四枚である。

一、会話の人数

子どもは、お互いに話をするときに、何人くらいで話をしているだろうか。これを、三才、四才、五才と年令別にわけてみると、図1.1aの通りである。図にみられるように、五才の子どもは、三、四才に比べて、やや人数が多くなっている。

次に、各年令ごとに、男の子だけの会話のグループ、女の子だけのグループ、男女混合のグループ、先生をまじえたグループにわけて集計すると、図1.1b、d、および第1表のようになる。ここにみるように、会話の人数については、三才児も五才児も、男だけのグループ、女だけのグループによる差はない。男女混合のグループは、やや人数が多くなる。教師が会話に加わると、三才児では会話の人数が多くなる傾向があるが、五才児では、子どもだけのグループと相異はない。

左の図表をみると、会話の人数は、だいたい三人前後が多いことがわかる。五人をこえる会話は急激に減少している。

会話の人数は、一年間の最初と最後の二つの時期により、かなり相異する。三十四年度始の四、五月の資料を比較してみると、第1表右欄のように、三才、四才において、会話の人数は減少している。また、三才児では、教師の混る会話が著しく多いことが特長的である。三才児のはじめにおいては、教師と

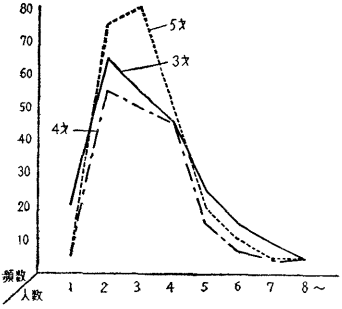


図 1・1a　会話の人数（年令別）

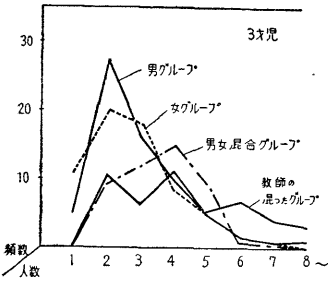


図 1・1b 会話の人数（3 才児）

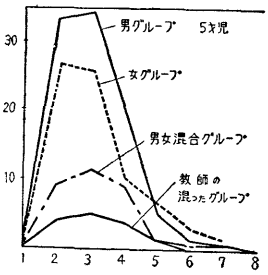


図 1・1d 会話の人数（5 才児）

第1表　会話の人数

		33年度学年末		34年度学年始	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差
3才	男のみ	3.0	1.4	1.7	0.6
	女のみ	2.8	1.4	2.7	0.5
	男女混合	3.7	1.2	3.0	0.0
	先生を交える	4.3	1.8	2.6	0.9
4才	男のみ	3.0	1.2	2.9	1.0
	女のみ	3.3	1.6	2.7	0.7
	男女混合	3.4	1.2	2.8	0.9
	先生を交える	3.7	1.6	3.4	0.8
5才	男のみ	3.1	1.1	3.3	1.4
	女のみ	3.3	1.4	2.7	1.4
	男女混合	3.3	1.2	4.6	1.7
	先生を交える	3.5	1.2	3.1	0.9

第2表　会話の交渉数

		33年度学年末		34年度学年始	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差
3才	男のみ	5.1	3.9	4.3	4.1
	女のみ	5.2	4.2	3.7	0.9
	男女混合	5.6	3.5	4.0	0.0
	先生を交える	6.4	4.9	4.8	3.1
4才	男のみ	4.8	3.1	4.3	2.5
	女のみ	5.1	3.2	5.7	6.0
	男女混合	5.7	4.4	4.4	1.9
	先生を交える	4.8	3.9	5.2	2.7
5才	男のみ	5.6	4.6	5.6	4.9
	女のみ	5.9	4.7	5.1	2.8
	男女混合	5.4	4.0	5.9	3.8
	先生を交える	5.2	3.8	4.6	2.1

の会話が言語指導上とくに重要であることを示すものであろう。

四月には、三才はすべて新入園児であるから、集団生活にもなれないし、年令も小さいので、会話の人数も少ないと考えられる。五才児は、すべて昨年度の四才児のもち上りで、会話の人数はほとんどかわっていない。四才児は、半分は三才児のもち上りで、半分は新入児であるが、ちょうど、三才児と五才児の中間になっている。また、三、四才児は、著しく大人数で話をしていることが少ないのも顕著である。

以上の点を要約すると、学年始では、三、四才児は、二―三人、学年末になると、三、四、五才児を通じて、三人、四人のグループが多くなるといえる。自然にできる子どもの会話の人数は、だいたい以上のような具合であり、非公式にうちとけて話す場合は、二、三、四人くらいの小さなグループが適当であることを示している。

二、会話は、何回くらい往復するか

子ども同志の会話は、そういつまでもつづくものではない。ひと

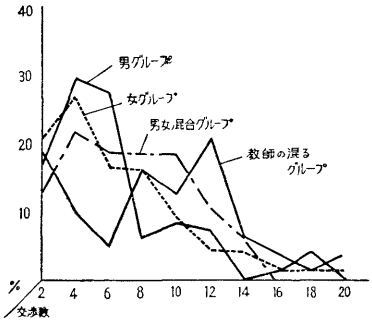


図 2・1B 会話の交渉数（学年末、3 才児）

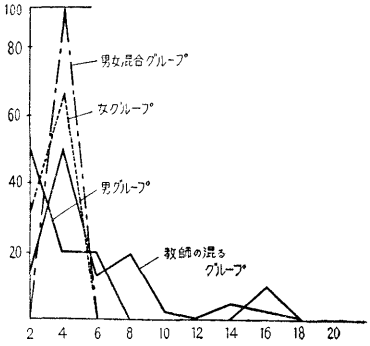


図2・2B 会話の交渉数（学年始、3 才児）

くぎりの会話は、そこに集まる子どもたちから、十回か二十回も発言があると、それで終結する場合が多い。それぞれの子どもの発言を一回と数えて、（ただし、相互交渉も一回、一方交渉もひとしく一回と数える）交渉数を、年令別、グループ別に集計すると、図2.1Bおよび、第2表の左欄の通りである。

ここからわかることは、

1. 3才児では、教師を混えた会話が、交渉数がもっとも多く、次いで、男女混合グループが多い。
2. 4才児でも、3才児と同様の傾向がみられるが、5才児になると、男の子だけのグループも、女の子だけのグループも、男女混合グループも、教師を混えた場合も、会話の交渉の数はほとんどかわらない。

学年始の会話の交渉数を、同様にして示すと、図2.2Bおよび、第2表の右欄の通りであり、三才児においては、とくに会話の交渉数が少ないことが顕著であり、四才児も同様の傾向がある。故に、新入の時、および、年令の小さい時は、会話の交渉の数も少ないということができる。

三、話　題

会話の話題を分類して集計してみる。次にその規準と例をあげておこう。

A　家庭のこと

A_1　家庭の特性――家族の名前、その様子、父の職業など。

A_2　家庭の所有物――家でかっている犬、猫、咲いている花など、家にある遊び道具のこと。

A_3　家庭での経験――家の人の話したこと、遊びに行ったこと、旅行、デパート、食堂など。

（例）あつし「うち金魚いるよ」
ゆきお「うち、おたまじゃくしいるの」
ふみお「うちにもおたまじゃくしいるよ、一つ」
のぼる「うちにもさ、かにがいるよ、かに七匹」
ゆきお「うちにも、もっといる。うちへくればあげるよ。いっぱいいたんだけど、はなしてあげたの」
（A_3の例、えを描きながら話している）

B　社会経験

B_1　社会の話題――テレビ、ラジオ、新聞などを通して

B_2　マスコミを通して――（B_1を除く）月光仮面、スーパーマンなど。

B_3　社会行事――幼稚園外での経験

B_4　社会事象――乗物、お店など

（例）あきひこ「ぼく皇太子だよ」
かつひろ「ぼくだよ」
あきひこ「まさあきちゃんにきいてごらん」
かつひろ「きいてきてよ」

あきひこ「出発します」
みつや　「馬が動かないんだよ」
あきひこ「早くしてよ」
みつや　「だめなんだよ」

（B_1の例5才児男）

C　幼稚園のこと

C_1　友だちのこと――友だちの製作品など
C_2　先生のこと
C_3　幼稚園での遊び
C_4　幼稚園での行事――卒業式、遠足、誕生会など。

（例）あさこ「ひろしちゃん、おやすみじゃないのにあそこに書いてあるよ」
たかこ「おなかがいたいのかもしれない」
「おやすみの人は、おなかが痛いんだってママが言ったもん」
あさこ「おねつが出たのかもしれない」
たかこ「ご用ができたのかもしれない」

（四才児、弁当の時）

あきお　「ケーキできたよ」（砂型にいれて出す）
りょう一「ケーキ？　そうしたらこうやって上にみつをかけるんだよ（と水をかける）ねえ、ケーキつくらないの（のぶおに）ぼくとあきおちゃんつくったよ」
のぶお「うん」（砂を手でこねて）
「うわー大きいのができちゃったよ。あきおちゃん、ここにお水少しちょうだい」

（C_1の例　砂場にて5才児）

D　自分のこと

E　自然現象

（例）あつこ「あらこれ何かしら」とかたつむりをつまみあげる
しんや「こわいんだぞう、でんでんむしだぞ」
あつこ「死んでるのかと思った、しらなかった」
ひろと「生きてるんだぞ、おとななんだぞ」
あつこ「でも心臓動いてないじゃないの」
「ちょっと、これ生きてるかたつむりよ、動かないわ、水にいれてみようか」

F　ことばあそび――大きさ比べ、高さ比べ、しりとりなど、

（例）あいこ「まさあきちゃんが一番高い、ほらほら、私のこれよ、高いでしょう」

（身長のグラフをみながら）

ふゆお「ぼくの方が高いよ」
あいこ「ここゆりこちゃん、わあ、ゆりこちゃん小さい、ここよ」
ふゆお「ぼく、小さいや――」
ゆきこ「これまさあきちゃんよ」
ふゆお「ウワ――」

（五才児）

G　想像的なこと――童話などから取材したもの、おひめさまなど

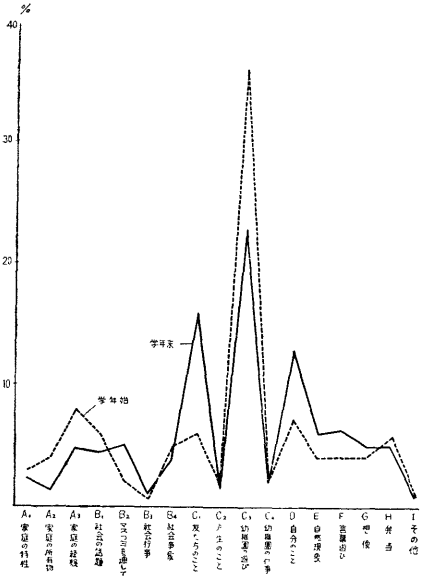
H　弁当に関するもの

I　その他

集計の結果は、図4の通りである。ここから次のことを指摘することができる。

(一)　全体的にみて、幼稚園での遊びに関すること（C_3）が各年令とも最高である。すなわち、遊びながら、その中で必要なことや、現在やっていることについてお互いに話す会話が多い。

図4　会話の話題



(二)　次に、幼稚園における他の友だちのこと（C_1）が多い。この項目には、年令差があることが著しい。すなわち、三才児に少なくまた、学年始に著しく少ない。

(三)　自分のことに関する会話（D）もかなり上位を占めるが、三才児に比較的多い傾向がある。すなわち、自分のことを競って話したがる傾向は三才児に強いと言える。

(四)　自然物に関する会話（E）も、三才児に多い傾向がある。三才児は、その場にある珍らしいものに注意をむけることが多く、年長になると、遊びに熱中して、その方に多くのエネルギーが向けられるからだろうか。

(五)　家庭における経験や、新聞などを通しての社会の話題、テレビにあらわれる話題も、かなりの比率を占めている。いわゆる、お話らしいおはなし、はこの部分に属するものが多いが、これも、ただ手ぶらで話しているというよりも、何かしながら、ちょっとしたことがきっかけになって話していることが多い。弁当を食べながら、家庭、社会のことが話題に上ることは多いし、絵をかきながら家での経験を話しあったり、砂場であそびながら、新聞で話題になっていることを話したりする。

家庭、社会の話題は、性差が著しい。それは、図4.3 a および図4.3 c に見る通りである。すなわち、家庭の話題は、女子だけのグループに多く、社会の話題は、男子だけのグループ

図 4・3c 話題の性差（5 才児）

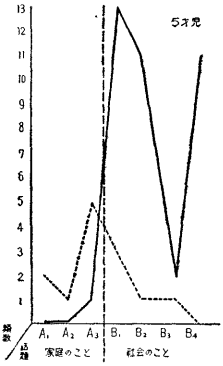
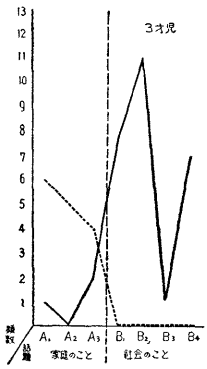


図 3・4 a 話題の性差（3 才児）



に圧倒的に多い。このことは三才からすでに顕著である。つまり、話題の男女差は三才以前にすでにでき上っていることを意味する。

一体、どのような過程をへて、このような男女差ができるのだろうか。

(六) 話題は、時間とともにやや変化する。各話題を、9—10時、10—11時半 11時半—12時半、12時半以後にわけて集計してみると女の子のグループの家庭の話題は、登園直後に多い。つまり、家からきたばかりのときに、新鮮な印象をもって、家のことを話しする。男の子も同様に、9時からの時間には、社会の話題が多い。しかしこれは 10時になって遊びが進展すると、もっと増加する。遊びそのものに関することや、友だちに関することは、遊びの最も活発な10時から11時半までの間に多い。

先生との間の会話では、家庭に関することが比較的多く、また、自分のことに関する会話、自然物に関する会話などが多い。

幼稚園の中で自然におこなわれている会話を拾って分析したのであるが、その中で幼児がいかに熱心に、活発にさまざまな話題についてお互いに話をしているかを見ることができた。自然におこなわれる会話は、二、三、四人くらいの小人数の場合が多く、七、八人をこえる場合は稀であるが、そのくらいの人数でお互いに話すことは本当に楽しいことのようにみえる。男の子だけの場合、女の子だけの場合、男女一しょの場合、それぞれによって、話題も違うし、交渉のしかたも多少異なるので、いろいろのグループで話しあうことができるということは、言語の発達の上にも重要であろう。そして先生がその会話の中に加わるということは、先生にとっても、子どもにとっても楽しいことである。話をしながら、子どもたち同志、そしてまた、子どもと先生とは、互いに経験を分かちあい、愛情を交換している。その親しみの中の会話に、言語指導の基礎があるということができよう。